

【論文】

コリャーク語の名詞句階層と格・数標示

呉 人 恵
(富山大学)

The Animacy Hierarchy and Case/Number Marking in Koryak

KUREBITO, Megumi
Toyama University

Koryak NPs are classified into four main classes according to the different ergative marking, with gradations from the highest animacy class A to the lowest animacy class C. Class A has its own ergative marker **-nan** and contains only personal pronouns. Class B uses the locative case **-k** for the ergative and uses the animate marker **-ne** (Sg), **-jəka** (Pl). Proper nouns referring to humans and dogs, the personal interrogative pronoun meaning 'who', and kinship address terms are included in class B. Class C uses the instrumental case **-te** for the ergative but has no animate marker. Kinship reference terms, animal nouns and inanimate nouns are included in class C. There is also another class B/C which falls between the classes B and C with optional ergative marking, using the locative or instrumental, and the corresponding animate marking, optional, which includes human nouns, demonstrative pronouns, and the interrogative pronoun meaning 'which'.

The present paper is concerned with structural reflections of the animacy hierarchy in Koryak and examines in detail how the animacy hierarchy correlates with the grammatical phenomena of Koryak, paying special attention to the above-mentioned ergative case-marking and the animacy category.

はじめに

1. 文法概要

1.1. 形態音韻的特徴

1.2. 形態統語的特徴

2. コリャーク語の名詞句階層と能格標示

3. クラス A

4. クラス B

4.1. 固有名詞

4.2. 人称疑問代名詞「だれ」

4.3. 親族呼称

5. クラス C

6. クラス B/C

6.1. 普通人間名詞

6.2. 指示代名詞

6.3. 疑問代名詞「どの」

おわりに

Keywords: Koryak, hierarchy, ergative marking, number marking, animacy
キーワード: コリャーク語, 名詞句階層, 能格標示, 数標示, 有生性

はじめに

さまざまな言語において、名詞句階層がさまざまな文法現象に反映されていることはつとに知られているとおりである (Silverstein 1976, Dixon 1979, Comrie 1978; 1979; 1981 [1992] など)。コリャーク語 (Koryak)¹⁾ では、とりわけ、有生性が文法範疇として存在すること、名詞により能格が異なる形式的標示をうけることがその階層と密接にかかわっている。そこで本稿では、コリャーク語における名詞句階層と能格標示を中心とする文法構造へのその反映について、筆者が現地調査で得た資料をもとに考察したい²⁾。

コリャーク語と同系のチュクチ語の名詞句階層に関しては、すでにコムリー (Comrie 1978, 1979) がその概略について述べているが、コリャーク語に関しては、このような枠組みで名詞全体をとらえた視点はこれまで管見のかぎりでは見られない。ジュコヴァ (Zhukova 1972, pp. 97-104) は、有生性の高い名詞に付加される *-ne* (単数), *-jəka-k* (複数) の形式に注目し、これを人間名詞にのみ関わる「定 *opredelennost'*」の文法範疇としてとらえている。しかし、これでは有生性を軸に階層をなす名詞全体の中で人間名詞の位置づけは浮かび上がってこない。筆者はむしろ、すべての名詞がその階層により形式的、意味的に分類されるという視点に立ち、有生性の文法標示、能格標示を中心とする文法現象がどのようにその階層を反映しているのかを具体的に記述していく。なお、ジュコヴァ (Zhukova 同上) と筆者の具体的なデータならびにその扱いの違いについては、随時、言及していくものとする。

ところで、ここまで「有生性 Animacy」という用語をことわりなく用いてきたが、コリャーク語の名詞句階層がどのような意味的基準によってできているかについては、必ずしも定説があるわけではない。例えば、コムリー (Comrie 1979, p.323) は、チュクチ語の名詞句階層を論じる際、やはり「有生性 Animacy」という伝統的な用語を用いながら、一方ではこれが単純化しすぎた意味基準であるとも指摘している。たしかに、「有生性」という基準は、コリャーク語の実際にそぐわない面もある。例えば、コリャーク語では、普通人間名詞が任意に無生物名詞と同じ能格標示を受けることがあるのがその一例である。むしろ、コムリー (Comrie 1979, 同上) が指摘するように「個別化 Individualization」あるいは「顕著さ Saliency」といった別の意味的基準を設ける方がより適切であるかもしれない。ただし、本稿は、このような意味論的問題の解明を目的とするのではなく、文法現象の形態統語論的記述に重きを置くため、

1) コリャーク語はロシア連邦カムチャツカ州コリャーク自治管区、マガダン州セヴェロ・エヴェンスク地区を中心に分布する話者数4,500人ほどの言語である。周辺のチュクチ語 (Chukchi)、イテリメン語 (Itelmen)、ケレク語 (Kerek)、アリユートル語 (Alyutor) とともにチュクチ・カムチャツカ語族 (the Chukotko-Kamchatkan language family) を形成する。コリャーク語は方言分岐の高いことで知られており、主要な方言であるチャウチェヴァン方言 (Chawchəvan) ならびにパラナ方言 (Palana) 以外にも、パレニ (Paren)、イトカン (Itkan)、カメンスコエ (Kamenskoe)、アプカ (Apuka)、カラガ (Karaga) 方言などの存在が知られている (Zhukova 1968, p.271)。本稿で扱うコリャーク語はチャウチェヴァン方言である。この方言の音素目録は以下のとおり: *p, t, t', k, q, v, ʏ, ʕ, c, m, n, n', ŋ, l, l', j, w, i, e, a, o, u, ə* (注: 声の有無は対立的特徴をなさず、すべての閉鎖音は無声である。音声的に *c* は破擦音 [tʃ] である。'は歯音の口蓋化を表す)。

2) 本稿は、筆者が2000年12月22日~2001年1月12日にロシア連邦マガダン州セヴェロ・エヴェンスク地区エヴェンスク村で行なった現地調査で得られた資料に基づいている。この現地調査は、平成12年度文部省科学研究費補助金 (基盤研究 B2)「東北アジア諸民族の文化変化とアイデンティティの形成に関する文化人類学的研究」(代表者: 北海道大学文学部教授 熊本孝, 課題番号: 11691057) の援助によって行なわれた。調査には Kechgelxut Irina Gergol'tagovna さん (1936年生, 女性) に主に協力していただいた。

ここではこれに深入りすることはせず、伝統的に認められてきた「有生性」という用語を引き続き便宜的に用いていくことにする。

1. 文法概要

以下では、本稿の議論に関連する形態音韻的特徴ならびに形態統語的特徴のみを取り上げて概説する。

1.1. 形態音韻的特徴

コリャーク語の主たる形態音韻的現象としては、母音調和、*ə*挿入があげられる。まず、母音調和について述べる。コリャーク語では母音が基底において強母音 *i, e₁, u, ə₁* と弱母音 *e₂, a, o, ə₂* の2つのグループに分かれ、両者が1語において共起することは許されない。また、形態素の接続に際し、強母音はその語中での位置のいかんにかかわらず、対応する弱母音、すなわち、*i→e, e₂→a, u→o*³⁾に交替する。言い換えるならば、コリャーク語の母音調和は、語幹、接辞という形態素の種類のかんにかかわらず、強母音をもつ形態素が順行的にも逆行的にも弱母音を同化しえる母音調和であるといえる。ただし、コリャーク語には母音調和の規則に従わない例も数多く見出され、厳密な母音調和を有するチュクチ語とは対照的である（呉人徳司 [特古斯] 1995, pp.177-179）。

*ə*挿入は形態素の接続に際し、語頭、語末での2子音連続、語中での3子音連続が起こるのを避けるためのものである。

その他の形態音韻的現象としては、名詞語幹末母音の脱落、不定形での動詞語幹初頭子音の脱落、歯音の逆行的口蓋化、多様な子音同化などがあげられる。

1.2. 形態統語的特徴

名詞の文法範疇には、数、格、人称、さらに本稿で論じる有生性がある。数には単数、双数、複数があり、これらは絶対格においてのみ区別される。ただし、有生のクラスに属する名詞は、後述のとおり、絶対格で単数、双数、複数が区別されるだけでなく、斜格においても単数と複数の区別がなされる。格には11の格、すなわち、絶対格、場所格、道具格、与格、方向格、沿格、奪格、接触格、原因格、様態格、随格がある⁴⁾。統語における格標示は、能格型である。すなわち、自動詞主語と他動詞目的語は絶対格をとり、他動詞主語は能格をとる。ただし、本稿の骨子とも直接関わるが、能格専用の標識をもつのは人称代名詞のみで、その他の名詞はその有生性に応じて既存の格、すなわち道具格あるいは場所格を能格として援用する。人称は、名詞ならびに形容詞が述語になる場合、主語のそれがその述語に標示される。

動詞には、主語と目的語の人称と数が接頭辞と接尾辞によって標示される（ただし、1人称以外は接頭辞はしばしばゼロ）。接頭辞は通常、主格・対格型、接尾辞は能格型を示す。すなわち、自動詞では接頭辞、接尾辞いずれも主語を表すが、他動詞では接頭辞が主語、接尾辞が

3) 本稿では基底形は太字で、そこから形態音韻規則によって導かれる表層形はイタリック（太字）で表わされている。

4) この他、筆者は従来「所有形 Possessive」「関係形 Relational」と称され、格形式とは別個に扱われてきたもの（Koptjevskaja-Tam 1995）を属格と考えているが、これについてはまずはその詳細を論じる必要があるため、ここでは伝統的に認められている格のみをあげている。

目的語を表す。

コリャーク語では、動詞と名詞項が形態的に照応を示すために、語順は比較的自由であるといえる。すなわち、主語は動詞に前置されるのが一般的であるが、目的語は動詞の前後いずれにも置かれる。また、修飾語も被修飾語の前後いずれにも置かれる。

2. コリャーク語の名詞句階層と能格標示

コリャーク語の名詞は能格がどのような形式的標示を受けるかにより、大きく次の4つに分類される。

- 1) 独自の能格標識 **-nan** をもつ名詞 (以下, クラス A)
- 2) 能格に場所格 (**-k**) が援用され, 同時に有生の標示 **-ne** (単), **-jəka** (複) をうける名詞 (以下, クラス B)
- 3) 能格に道具格 (**-te**) が援用され, 有生の標示を受けない名詞 (以下, クラス C)
- 4) 能格として任意に場所格も道具格もと, 有生の標示も任意である名詞 (以下, クラス B/C)

このうち, 1) の独自の能格標識をもつクラス A には人称代名詞, 2) の場所格が援用されるクラス B には, 人間や家畜を表す固有名詞, 人称疑問代名詞, 親族呼称, 3) の道具格が援用されるクラス C には, 親族名称, 動物名詞, 無生物名詞, 4) の任意に場所格, 道具格いずれもが用いられるクラス B/C には, 普通人間名詞, 指示代名詞, 「どの」を表す疑問代名詞などがそれぞれ含まれる (表1 参照)。

表1 コリャーク語の能格標示の違いによる名詞の分類

	A	B	C	B/C
能格標識	-nan	-ne-k/-jəka-k	-te	-ne-k/-jəka-k~-te
名詞の種類	人称代名詞	固有名詞 人称疑問代名詞「だれ」 親族呼称	親族名称 動物名詞 無生物名詞	人間名詞 指示代名詞 疑問代名詞「どの」

能格標示の違いに反映されるこのような名詞の区別は, これまでシルバーステイン (Silverstein 1976), ディクソン (Dixon 1979, p.85) らによって指摘されてきたいわゆる名詞句階層におおよそ対応している⁵⁾。以下では, 各クラスの名詞の能格標示, 有生性の文法範疇をはじめとする文法現象を具体的に見ていく。

3. クラス A

上述のとおり, 能格専用の標識 (**-nan** [**-nan**]) をもつクラス A には唯一, 人称代名詞が含まれる。ただし, 人称代名詞は能格形において単数, 複数の区別がされるだけで, 双数は区別

5) 註4で触れた「所有形 Possessive」「関係形 Relational」の形式的標示の違いも, 実はこのような名詞句階層を反映したものであると考えられる。これについては改めて別稿をもうけて考察したい。

されない（表2参照）。

表2 コリャーク語人称代名詞の能格形

	単数	複数
1人称	<i>yəm-nan</i>	<i>mocy-ə-nan</i>
2人称	<i>y-ə-nan</i>	<i>tocy-ə-nan</i>
3人称	<i>ə-nan</i>	<i>əcy-ə-nan</i>

以下ではこのうち、*ənan*, *mocyənan*, *əcyənan* の文例を見られたい。

- (1) *ə-nan* *ye-leʂo-lin* *kajŋ-ə-n* *ŋanko* *yəcyol* *əjava-k*
 彼／彼女-能 過去-見る-3単目 熊-挿入-絶単 あそこで 上で 遠隔地-所
tənupe-l'q-ə-k
 山-表面-挿入-所
 「彼／彼女は熊を向こうの上の山で見た」
- (2) *mocy-ə-nan* *məc-ca-jta-la-ŋ-ə-n* *əjava-k*
 私たち-挿入-能 1複主-未来-取りに行く-複-未来-挿入-3単目 遠隔地-所
va-lʂ-ə-n *ineŋ-Ø*
 ある-分詞-挿入-絶単 貨物用櫃-絶単
 「私たちはずっと向こうにある貨物用櫃を取りに行こう」
- (3) *əcy-ə-nan* *ne-ku-leʂo-ŋ-ə-n* *wejem-ə-k*
 彼ら-挿入-能 反転-現在-見る-現在-挿入-3単目 川-挿入-所
inini-lʂ-ə-n *ənnəən*
 現れる-分詞-挿入-絶単 魚(絶単)
 「彼らは川で魚が飛び跳ねるのを見た」

4. クラス B

クラス B には、人間および家畜の固有名詞、人称疑問代名詞、親族呼称が含まれる。家畜の固有名詞としてこれまでに確認されているのは犬のそれのみで、コムリー (Comrie 1992, p. 210) が同系のチュクチ語について指摘しているような、トナカイの固有名詞は確認されていない。クラス B に属する名詞には能格として場所格 (-k) が採用されるが、この際、有生の標識 -ne (単数), -jəka (複数) も義務的に場所格接尾辞の直前に付加され、全体で -ne-k [-na-k/-ne-k⁶⁾] (単数), -jəka-k [-jək⁷⁾] (複数) という標示をうける。

6) -na-k/-ne-k は母音調和による異形態。

7) この表層形 -jək は、-jəka-k → -jəka (-k 脱落) → -jək (語幹末尾母音 a 脱落) のように導かれると考えられる。

4.1. 固有名詞

まずは、人間を表す固有名詞の能格標示の例をみられたい。

- (4) *l'aŋe-na-k* *teik-ə-nin-Ø* *icʃ-ə-n*
 リャゲ-有単-所 (能) 作る-挿入-3 単主 / 3 単目-過去 毛皮コート-挿入-絶単
qlavol-ə-ŋ
 夫-挿入-与
 「リャゲ (女性名) は夫に毛皮コートを縫った」
- (5) *qecyəlqot-na-k* *ujetik-Ø* *ku-tejk-ə-ŋ-nin*
 ケチゲルコット-有単-所 (能) 櫛-絶単 現在-作る-挿入-現在-3 単主 / 3 単目
 「ケチゲルコット (男性名) は櫛を作っている」
- (6) *l'aŋe-jək* *ne-ku-tejk-ə-ŋ-ə-n* *icʃ-ə-n*
 リャゲ-有複 反転-現在-作る-挿入-現在-挿入-3 単目 毛皮コート-挿入-絶単
 「リャゲたちは毛皮コートを縫っている」
- (7) *qecyəlqot-jək* *ujetik-Ø* *ne-ku-tejk-ə-ŋ-nin*
 ケチゲルコット-有複 櫛-絶単 反転-現在-作る-挿入-現在-3 単目
 「ケチゲルコットたちは櫛を作っている」

(6) (7) の *l'aŋe-jək*, *qecyəlqot-jək* は必ずしも「複数のリャゲという名前の人」「複数のケチゲルコットという名前の人」である必要はなく、「リャゲをはじめとする複数の人」「ケチゲルコットをはじめとする複数の人」の意に解することができる。

現在はコリャークの人々もロシア人の習慣にならって名・姓・父称を名乗るのが一般的だが、その際には、名・姓・父称のすべてが有生の標識を受けて能格に場所格を取り、相互に照応を示す。

- (8) *irina-na-k* *qecyəlqot-na-k*
 イリーナ-有単-所 (能) ケチゲルコット-有単-所 (能)
yeryolitayovna-na-k *ko-kətʃajŋa-ŋ-nen*
 ゲルゴリタゴヴナ-有単-所 (能) 現在-叱る-現在-3 単主 / 3 単目
 「イリーナ・ケチゲルコット・ゲルゴリタゴヴナは彼／彼女を叱っている」

次は、犬の固有名詞の例である。犬には、性別、毛の色などにより、*əvaqli*「エヴァクリ (雄の黒犬)」, *wel'vəŋ*「ウェリヴァン (雌の黒犬)」, *ilyəqli*「イルガクリ (雄の白犬)」, *il'yəŋ*「イルガン (雌の白犬)」などの名前がつけられる。

- (9) *əvaqli-na-k* *ənnəən* *ku-nu-ŋ-ə-nin*
 エヴァクリ-有単-所 (能) 魚 (絶単) 現在-食べる-現在-挿入-3 単主 / 3 単目
 「エヴァクリ (雄の黒犬名) は魚を食べている」

有生の標識 **-na** (単数), **-jəka** (複数) は能格のみならず, その他の斜格にも現れる。

- (10) *kamak-na-ŋ ɲənvəq jamkəlɕ-o əjava-ŋqo ye-jel-linew*
 カマク-有単-与 多くの 客-絶複 遠隔地-奪 過去-来る-3 複主
 「カマクのところに遠くから多くの客が来た」
- (11) *jotvayəl-ə-na-ŋqo en'ajacelɕ-o ecyi*
 ジョトヴァガル-挿入-有単-奪 客-絶複 今
t-ə-jətɕe-new-Ø ko-jajt-ə-la-ŋ-Ø
 1 単主-挿入-出会う-3 複目-過去 現在-帰宅する-挿入-複-現在-3 主
 「今, 私はジョトヴァガルのところから客たちが家に帰るところに出会った」
- (12) *kavaw-jəka-kjet t-ə-kimav-ə-k-Ø*
 カヴァウ-有複-原因 1 単主-挿入-遅れる-挿入-1 単主-過去
jajt-ə-lɕ-ə-jyəm
 帰る-挿入-分詞-挿入-1 単
 「カヴァウたちのせいで私は家に帰るのが遅くなった」
- (13) *notajava-jəka-jtəŋ wutken ɕaqaw-la-j-Ø yekeŋe-lɕ-o*
 ノタヤーヴァ-有複-向 今し方 出かける-複-過去-3 主 トナカイ橇-分詞-絶複
 「ノタヤーヴァたちの所に向かって今し方, トナカイ橇の人たちが出かけた」

ちなみに, 人間の固有名詞 *qecyəlqot* の格変化は下の表 3 のとおりである。道具格, 随格が欠如していること, また様態格には有生の標識がつかず, 単複同形であることに注意されたい。

表 3 固有名詞 *qecyəlqot* の格変化表

	単数	複数
絶対格	<i>qecyəlqot-Ø</i>	<i>qecyəlqot-ə-nte</i> (双) <i>qecyəlqot-o</i> (複)
場所格	<i>qecyəlqot-na-k</i>	<i>qecyəlqot-jək</i>
与格	<i>qecyəlqot-na-ŋ</i>	<i>qecyəlqot-jək-ə-ŋ</i>
方向格	<i>qecyəlqot-na-jtəŋ</i>	<i>qecyəlqot-jəka-jtəŋ</i>
沿格	<i>qecyəlqot-na-jpəŋ</i>	<i>qecyəlqot-jəka-jpəŋ</i>
奪格	<i>qecyəlqot-na-ŋqo</i>	<i>qecyəlqot-jəka-ŋqo</i>
接触格	<i>qecyəlqot-na-jite</i>	<i>qecyəlqot-jəka-jite</i>
原因格	<i>qecyəlqot-na-kjit</i>	<i>qecyəlqot-jəka-kjit</i>
様態格	<i>qecyəlqot-u</i>	<i>qecyəlqot-u</i>

なお, 随格の欠如には, **-k omakaŋ** (**-k** 場所格, **omakaŋ** 「いっしょに」) の形式が代用される。これは有生の標示をうけるすべての名詞について同様である。

- (14) *muju qecyəlqut-na-k omakaŋ mət-ko-twa-la-ŋ*
 私たち(絶) ケチゲルコット-有単-所 いっしょに 1 複主-現在-住む-複-現在
 「私たちはケチゲルコットといっしょに住んでいる」

4.2. 人称疑問代名詞「だれ」

「だれ」を意味する人称疑問代名詞もクラス B に含まれ、能格は *-na-k* [*-na-k/-ne-k*] (単数), *-jəka-k* [*-jək*] (複数) で標示される。また、上述の固有名詞同様、その他の斜格においても義務的に有生の標示 *-na* (単数), *-jəka* (複数) をうける。

以下は、人称疑問代名詞が能格をはじめとする斜格で現れている例である。

- (15) *mik-ne-k ənn'ej-u ənn-u ye-jel-linew me-ŋqo*
 誰-有単-所(能) これ-絶複 魚-絶複 過去-持ってくる-3 複目 どこ-奪
əjava-ŋqo
 遠隔地-奪
 「誰がこれらの魚をどこの遠くから持ってきたのだ？」
- (16) *mik-jək ŋajen jaja-ŋa ne-ku-tejk-ə-ŋ-ə-n*
 誰-有複 あの(絶単) 家-絶単 反転-現在-作る-挿入-現在-挿入-3 単目
 「誰たちがあの家を建てているのか？」
- (17) *mek-na-jtəŋ yəcci in-ekmit-i-Ø*
 誰-有単-向 お前(絶単) 逆受動-取る-過去-2 単主
 「お前は誰につかまったのか？」
- (18) *mek-na-ŋqo ŋajej-o ye-jel-linew Sujemtewilŋ-u*
 誰-有単-奪 あれ-絶複 過去-来る-3 複主 人-絶複
 「あの人たちは誰のところから来たのですか？」
- (19) *mik-jəke-kjet tuju uŋje inŋe e-jet-ke*
 誰-有複-原因 お前たち(絶複) 否定 すぐに 否定-来る-否定
el-la-tək-Ø
 ある-複-2 主-過去
 「誰たちのせいでお前たちはすぐに来なかったのだ？」

ちなみに、疑問人称代名詞の格変化表は以下のとおりである。

表 4 疑問人称代名詞の格変化表

	単数	複数
絶対格	<i>meki</i> (単)	<i>meki-nti</i> (双) <i>meki-w</i> (複)
場所格	<i>mik-ne-k</i>	<i>mik-jək</i>
与格	<i>mek-na-ŋ</i>	<i>mek-jək-ə-ŋ</i>
方向格	<i>mek-na-jiəŋ</i>	<i>mek-jək-a-jiəŋ</i>
沿格	<i>mek-na-jpəŋ</i>	<i>mek-jək-a-jpəŋ</i>
奪格	<i>mek-na-ŋqo</i>	<i>mek-jək-a-ŋqo</i>
接触格	<i>mik-ne-jite</i>	<i>mik-jək-e-jite</i>
原因格	<i>mik-ne-kjit</i>	<i>mik-jək-e-kjit</i>
様態格	<i>mik-nu</i>	<i>mik-nu</i>

一方、ジュコヴァ (Zhukova 1972, p.188) は、接触格、原因格を単複いずれも同形式の *mik-jite*, *mikə-kjit*, 様態格を単数 *mik-ne-nu*, 複数 *mikə-cyənenu* としている。筆者の記述との形式上の違いがなにによるものかは今のところ明らかではない。

4.3. 親族呼称

親族呼称も通常、クラス B に含まれ、能格には場所格が援用され有生の標示をうける。ただし、コリャーク語には同じ親族を表すのに、親族名称と呼称の両方の形式があり、それぞれに別個の形式をもつ場合と、1つの形式が親族名称としても呼称としても使われる場合とがある。有生性の標示はそのいずれの場合かにより異なる。直系の親族名称、親族呼称（いずれも絶対格単数形）の対応は次の表5のとおりである。「父母」「兄弟姉妹」には親族名称と呼称が並存するが、それ以外には1つの形式しかないことに注目されたい。

なお、ここでいうコリャーク語の呼称とは、日本語の「お父さん」「お母さん」と同様、呼びかけに用いられるのみならず、文中の名詞項あるいは補語としても用いられるものを言う。

表 5 直系の親族名称・親族呼称の対応表

親族名称	親族呼称
	<i>apappo</i> 「祖父」
	<i>an'a, vava</i> 「祖母」
<i>en'pic</i>	<i>appa</i> 「父」
<i>əlla</i>	<i>əmma</i> 「母」
<i>qajtakəŋən</i>	<i>qattak</i> 「(男にとっての) 兄弟」
<i>jič samjitumyən</i>	<i>jič lom</i> 「(女にとっての) 兄弟」
<i>cakəyet</i>	<i>cakke</i> 「(男にとっての) 姉妹」
<i>cakettomyən</i>	<i>cakok</i> 「(女にとっての) 姉妹」
	<i>akək</i> 「息子」
	<i>ŋavakək</i> 「娘」
	<i>jəŋjəkmiŋəŋ</i> 「孫息子」
	<i>jəŋjəŋavakək</i> 「孫娘」

親族名称と呼称に別個の形式がある「父母」「兄弟姉妹」の場合には、呼称は常に有生の標示を受けるが、親族名称は有生の標示を受けない。ジュコヴァ (Zhukova 1972, p.98) は親族名称が任意に標示を受ける例をあげているが⁸⁾、筆者の調査ではこれは認められていない。一方、1つの形式しかない場合には、常に有生で現われるものと、任意に有生の標示を受けるものと、その現われ方に揺れが見られる。

4.3.1 親族名称と呼称が併存する場合

1つの親族に対して親族名称と親族呼称が併存する場合には、呼称は場所格を能格として援用し有生の標示をうけるが、名称は能格には道具格が用いられ、有生の標示はなされない。親族名称に対して任意に有生の標示をして場所格を用いたり、呼称に対して有生の標示をはずして道具格を用いたりすることはできない。したがって、親族名詞は本来、後述のクラスCに含まれるが、意味的に対応する親族呼称と能格ならびに有生性の標示を比較するために、以下、呼称とともに例をあげる。まずは、異なる形式をもつ親族名称、親族呼称がそれぞれ能格で現れている例である。

- (20) *amma-na-k / əlləʃ-a ko-kətʃajja-ŋ-nen*
お母さん-有単-所 (能) 母-具 (能) 現在-叱る-現在-3 単主 / 3 単目

ənnə

彼/彼女 (絶)

「お母さん/母は彼/彼女を叱っている」

- (21) *appa-na-k / en'pici-te ku-tejk-ə-ŋ-nin*
お父さん-有単-所 (能) 父-具 (能) 現在-作る-挿入-現在-3 単主 / 3 単目

ujetik-Ø

橋-絶単

「お父さん/父は橋を作っている」

- (22) *cakok-na-k / cakettomy-a ləʃo-nin-Ø ənnə*
妹-有単-所 (能) 妹-具 (能) 見る-3 単主 / 3 単目-過去 彼/彼女 (絶)

「妹は彼/彼女を見た」

能格以外の斜格における有生標示の有無も、能格に準じる。以下は、親族名称 *en'pici* 「父」と親族呼称 *appa* 「お父さん」がそれぞれ能格以外の斜格で用いられている例である。後述のとおり、クラス B には現れない随格が親族名称では現れていることに注目されたい。

- (23) *y-en'pici-te muju aɣəve mət-o-ŋal-la-Ø*
随-父-随 私たち (絶) 昨日 1 複主-木-採りに行く-複-過去

「昨日、私たちは父といっしょに木を採りに行った」

8) 例えば、ジュコヴァ (Zhukova 1972, p.98) は親族名称 *en'pici* 「父」の能格形として *en'pici-ne-k* と *en'pici-te* の2つの形式をあげているが、筆者の調査では前者は許容されず、有生の標示をうけない道具格の *en'pici-te* のみが可能である。

- (24) *yəmmo an'pece-jtəŋ t-en'ajace-k-Ø*
 私 (絶) 父-向 1 単主-訪ねる-1 単主-過去
 「私は父のところに客に出かけた」
- (25) *appa-na-jpəŋ muju mət-ta-la-Ø jamk-etəŋ*
 お父さん-有単-沿 私たち (絶) 1 複主-寄る-複-過去 隣村-向
qət-ə-lɿ-ə-muju
 行く-挿入-分詞-挿入-1 複
 「私たちは父のところに寄ってから隣村に出かけた」
- (26) *appa-na-kjet yəmmo maleta t-ə-ku-lle-ŋ*
 お父さん-有単-原因 私 (絶) ゆっくり 1 単主-挿入-現在-行く-現在
 「お父さんのせいで私はゆっくり行っている」
- (27) *muju appa-jəka-kjet wutku mət-ə-tkew-la-Ø*
 私たち (絶) お父さん-有複-原因 ここに 1 複主-挿入-泊まる-複-過去
 「両親のために私たちはここに泊まった」

ちなみに、親族名称 *en'pic* 「父」と親族呼称 *appa* 「お父さん」それぞれの格変化は以下の表 6 のとおりである。

表 6 *en'pic, appa* の格変化表

	<i>en'pic</i> 「父」	<i>appa</i> 「お父さん」	
		単数	複数
絶対格	<i>en'pic-Ø</i> (単) <i>en'pici-te</i> (双) <i>en'pici-w</i> (複)	<i>appa-Ø</i> (単)	<i>appa-te</i> (双) <i>appa-w</i> (複)
場所格	<i>en'pici-k</i>	<i>appa-na-k</i>	<i>appa-jəka-k</i>
与格	<i>en'pici-ŋ</i>	<i>appa-na-ŋ</i>	<i>appa-jək-ə-ŋ</i>
方向格	<i>an'pece-jtəŋ</i>	<i>appa-na-jitəŋ</i>	<i>appa-jəka-jtəŋ</i>
奪格	<i>an'pece-ŋqo</i>	<i>appa-na-ŋqo</i>	<i>appa-jəka-ŋqo</i>
沿格	<i>an'pece-jpəŋ</i>	<i>appa-na-jpəŋ</i>	<i>appa-jəka-jpəŋ</i>
接触格	<i>en'pici-jite</i>	<i>appa-na-jite</i>	<i>appa-jəka-jite</i>
原因格	<i>en'pici-kjit</i>	<i>appa-na-kjit</i>	<i>appa-jəka-kjit</i>
様態格	<i>en'pici-nu</i>	<i>appa-no</i>	<i>appa-no</i>
随格	<i>ɣ-en'pici-te</i>	_____	_____

4.3.2. 親族名称と呼称の区別がない場合

親族名称と呼称の区別がなく、いずれにも同じ形式が用いられる場合には、標示のしかたが一樣ではない。以下、いくつかの語例をあげて見ていく。なお、これ以下の名詞の格変化は、有生性の有無により表 6 の *en'pic* と *appa* の格変化のいずれかにしたがうため、以下ではその

パラダイムは省略する。

4.3.2.1 *vava* 「おばあさん／祖母」

祖母を表す語は *vava* のみで、呼称としても名称としても用いられる。*vava* では能格は常に場所格で現れ、また同時に有生の標示をうける。

- (28) *vava-na-k* *ko-kətʃejja-ŋ-nen*
 おばあさん／祖母-有単-所 (能) 現在-叱る-現在-3 単主／3 単目
jəl'ŋəkmiŋ-ə-n
 孫息子-挿入-絶単
 「おばあさん／祖母は孫息子を叱っている」
- (29) *yəmmo t-ə-ko-tva-ŋ* *yəm-ə-k*
 私 (絶) 1 単主-挿入-現在-住む-現在 1 単-挿入-所
vava-na-k
 おばあさん／祖母-有単-所
 「私は私のおばあさん／祖母のところに住んでいる」
- (30) *vava-na-jtəŋ* *mucyine-w* *kəmiŋ-u*
 おばあさん／祖母-有単-向 私たちの-絶複 子供-絶複
mət-tələ-new-Ø, *ŋanko* *ən-ə-k* *pəce*
 1 複主-連れて行く-3 複目-過去 そこに 3 単-挿入-所 しばらく
ja-tva-la-jke-Ø
 未来-住む-複-未来-3 主
 「私たちは子供たちをおばあさん／祖母のところに連れていった、彼らはしばらくそこにいるだろう」
- (31) *onm-ə-ajyəven'ŋ-a* *jajt-ə-la-j-Ø* *vava-na-ŋqo*
 とても-挿入-晩-具 帰宅する-挿入-複-過去-3 主 おばあさん／祖母-有単-奪
 「彼らは晩遅くおばあさん／祖母のところから帰ってきた」
- (32) *vava-jək-ə-ŋ* *ajyove* *ŋənvəq* *ye-lle-linew*
 おばあさん／祖母-有複-挿入-与 あの時 多くの 過去-行く-3 複主
jamkicilʃ-o
 客-絶複
 「おばあさんたち／祖母のところにあの時、たくさんの客が行った」
- (33) *vava-jəka-kjet* *juleq* *mət-ko-lla-la-ŋ*
 おばあさん／祖母-有複-原因 長く 1 複主-現在-行く-複-現在
 「おばあさんたちのせいで私たちは長いことかかっている」

4.3.2.2. *an'a* 「おばあさん／祖母」

上述の *vava* と同義の *an'a* にはやはり対応する親族名称がないが、*vava* とは若干異なるふるまいをする⁹⁾。すなわち、能格では通常、有生標示をうけるが、その際、3人称が目的語になる場合、有生の標示がなされないことがある。

- (34) *an'a-na-k* *ena-kətʂajŋa-j-Ø* *yəmmo*
おばあさん／祖母-有単-所 (能) 1 単目-叱る-過去-3 単主 私 (絶)
「おばあさん／祖母は私を叱った」
- (35) *an'a-na-k* *yəcci* *na-kətʂajŋa-ye-Ø*
おばあさん／祖母-有単-所 (能) お前 (絶) 反転-叱る-2 単目-過去
「おばあさん／祖母はお前を叱った」
- (36) *an'a-ta* *əno* *kətʂajŋa-nen-Ø*
おばあさん／祖母-具 (能) 彼／彼女 (絶) 叱る-3 単主／3 単目-過去
「おばあさん／祖母は彼／彼女を叱った」

有生標示が任意になる傾向は、*an'a* が能格以外の斜格で用いられるとき、より顕著になる。すなわち、1 人称を主語とする文中に *an'a* が能格以外の斜格で現われると有生の標示をうけやすいが、主語が2人称では任意、3人称では有生の標示がされなくなる傾向が見られる。例えば、主語の人称を異にするいくつかの文で、異なる現われ方をする *an'a* の場所格の例を見られたい。以下では主語が単数の例のみをあげるが、複数の人称においても同様の傾向が見られる。

- (37) *yəmmo* *an'a-na-k* *t-ə-ko-tva-ŋ*
私 (絶) おばあさん／祖母-有単-所 1 単主-挿入-現在-住む-現在
「私はおばあさん／祖母のところに住んでいる」
- (38) *yəcci* *an'a-na-k /* *an'a-k*
お前 (絶単) おばあさん／祖母-有単-所 おばあさん／祖母-所
ko-tva-ŋ-Ø
現在-住む-現在-2 単主
「お前はおばあさん／祖母のところに住んでいる」
- (39) *əno* *an'a-k* *ko-tva-ŋ-Ø*
彼／彼女 (絶単) おばあさん／祖母-所 現在-住む-現在-3 単主
「彼／彼女はおばあさん／祖母のところに住んでいる」

9) この同義語の存在が方言差を反映するものなのかどうかは、今のところ明らかではない。

4.3.2.3 目下の親族を表す親族名称・呼称

コムリー (Comrie 1979, pp.327-328) もチュクチ語について指摘しているように、コリャーク語でも子供、孫など1親等以上目下の親族を表す親族名称・呼称には有生の標示がなされない傾向がある。

- (40) *akka-ta* *ujetik-Ø* *ku-tejk-ə-ŋ-nin*
 息子-具 (能) 櫛-絶単 現在-作る-挿入-現在-3 単主 / 3 単目
 「息子は櫛を作っている」
- (41) *yəmmo* *akk-ə-k* *t-ə-ko-tva-ŋ*
 私 (絶) 息子-挿入-所 1 単主-挿入-現在-住む-現在
 「私は息子のところに住んでいる」
- (42) *jəlŋəkmiŋ-a* *ku-tejk-ə-ŋ-nin* *ujetik-Ø*
 孫息子-具 (能) 現在-作る-挿入-現在-3 単主 / 3 単目 櫛-絶単
 「孫息子は櫛を作っている」

この他、ジュコヴァ (Zhukova 1972, p.102) は物語における擬人化された動物が有生標示をうけることを指摘しているが、筆者の調査ではこれまでのところ、このような有生標示は確かめられていない。

5. クラス C

クラス C には、親族名称、動物名詞、無生物名詞が含まれる。これらは有生の標示をうけず、能格には常に道具格が援用される。親族名称についてはすでに上述したので、以下では、動物名詞語幹 *qoja* 「トナカイ」が能格をはじめとするいくつかの格で現われている例をあげる。クラス B には欠如している随格がここでは現れていることに注意されたい。

- (43) *ŋanko* *qoja-ta* *ku-nu-ŋ-nin* *pəŋo-n*
 あそこで トナカイ-具 (能) 現在-食べる-現在-3 単目 キノコ-絶単
 「あそこでトナカイがキノコを食べている」
- (44) *ənnə* *ŋanko* *qoja-k* *pelat-e-Ø*
 彼 (絶) あそこで トナカイ-所 残る-過去-3 単主
 「彼はあそこのトナカイのところに残った」
- (45) *ya-qoja-ta* *va-kkə* *metŋaŋ*
 随-トナカイ-随 いる-不定 よい
 「トナカイといえることはいいことだ」

6. クラス B/C

普通人間名詞，指示代名詞，疑問代名詞「どの」などは，任意に有生の標示をうけるいわばクラス B とクラス C の中間的な範疇である。

6.1. 普通人間名詞

固有名詞，親族名称，親族呼称以外の人間名詞（例：*el'sa* 「女」，*SujemtewilSəŋ* 「人」，*tumyətum* 「友人」など）は，その有生性の程度により能格は場所格でも道具格でも現われる。また有生の標示も任意である。

- (46) *el'sa-ta / el'sa-na-k yəcci ne-ku-Sejŋew-wi*
 女-具 (能) 女-有単-所 (能) お前 (絶単) 反転-現在-呼ぶ-2 単目
 「女がお前を呼んでいる」

- (47) *ənnəj qəlavol-te el'sa-kjet / el'sa-na-kjet*
 これら (絶双) 男-絶双 女-原因 女-有単-原因
ko-tkəŋewcin'-ŋ-i
 現在-喧嘩する-現在-3 双主
 「この 2 人の男は女が原因で喧嘩している」

6.2. 指示代名詞

指示代名詞は，主部の名詞が有生の標示をうける場合には，それに照応して同じく有生の標示をうける。

- (48) *ŋanen-ə-na-k el'sa-na-k yəcci ne-ku-Sejŋew-wi*
 あれ-挿入-有単-所 (能) 女-有単-所 お前 (絶単) 反転-現在-呼ぶ-2 単目
 「あの女がお前を呼んでいる」

- (49) *ənin-ə-ne-k el'sa-na-k yəcci*
 これ-挿入-有単-所 (能) 女-有単-所 (能) お前 (絶単)
ne-ku-Sejŋew-wi
 反転-現在-呼ぶ-2 単目
 「この女がお前を呼んでいる」

- (50) *ŋanen-ə-jək el's'a-jək jetem-Ø*
 あれ-挿入-有複 女-有複 テントカバー-絶単
ne-ku-nni-ŋ-ə-n
 反転-現在-縫う-現在-挿入-3 単目
 「あの女たちがテントカバーを縫っている」

- (51) *wutin-ə-jək* *elʕ'a-jək* *jetem-Ø*
 これ-挿入-有複 女-有複 テントカバー-絶単
ne-ku-nni-ŋ-ə-n
 反転-現在-縫う-現在-挿入-3 単目
 「この女たちがテントカバーを縫っている」

主部の名詞を取らずに、指示代名詞だけで単独に現われることも可能である。

- (52) *ŋanen-ə-na-k* (*an'a-na-k*) *ənnə*
 あれ-挿入-有単-所 (能) おばあさん/祖母-有単-所 (能) 彼/彼女 (絶)
ko-kətʕajja-ŋ-nen
 現在-叱る-現在-3 単主/3 単目
 「あの (おばあさん/祖母) が彼/彼女を叱っている」
- (53) *ənin-ə-ne-k* (*ilyəqli-ne-k*) *ənnə*
 この-挿入-有単-所 (能) イルガクリ-有単-所 (能) 彼 (絶)
ku-jyutku-ŋ-nin
 現在-噛む-現在-3 単主/3 単目
 「この (イルガクリ) が彼を噛んでいる」
- (54) *ənen-ə-jək-ə-ŋ* (*elʕa-jək-ə-ŋ*)
 この-挿入-有複-挿入-与 女-有複-挿入-与
t-ə-jəl-ə-n-Ø *kinuŋi*
 1 単主-挿入-与える-挿入-3 単目-過去 肉 (絶単)
 「この (女たち) に私は肉をあげた」
- (55) *ŋanen-ə-jəka-jtəŋ* (*ʕojemtwelʕ-ə-jəka-jtəŋ*) *t-ə-lqət-ə-k*
 あの-挿入-有複-向 人-挿入-有複-挿入-向 1 単主-挿入-行く-挿入-過去
 「私はあの (人たち) のところに行った」

主部名詞が有生の標示をうけない場合には、属部である指示代名詞は主部名詞に合成され単独で現れることはない¹⁰⁾。

- (56) *ŋanen-qoja-ta* *pəʕon-Ø* *k-enajej-ŋ-ə-nen*
 あれ-トナカイ-具 (能) き-この-絶単 現在-探す-現在-挿入-3 単主/3 単目
 「あのトナカイはきのこを探している」
- (57) *woten-kojŋ-ə-k* *n-ə-cəq-qin-Ø* *cajcaj*
 これ-コップ-挿入-所 形容-挿入-冷たい-形容-絶単 茶 (絶単)

10) コリャーク語の形態法における語幹合成についての詳細は、呉人恵1997, ならびに Kurebito, Megumi 2001を参照されたい。

ko-tva-ŋ-Ø

現在-ある-現在-3 単主

「このコップにはお茶が入っている」

6.3. 疑問代名詞 *meŋin* 「どの」

疑問代名詞 *meŋin* 「どの」も上述の指示代名詞と同様のふるまいをする。ジュコヴァ (Zhukova 1972, p.192) では、非有生の場合に主部名詞のみならず *meŋin* も分析的に格変化をすることが示されているが¹¹⁾、筆者の調査では、絶対格以外では主部名詞に合成され、分析的に現われることはない。

まずは、有生の標示をうけない例である。

- (58) *yənan meŋin qoja-ŋa ja-java-ŋ-ə-n-Ø*
 お前 (能) どの (絶単) トナカイ-絶単 未来-使う-未来-挿入-3 単目-2 単主

「お前はどのトナカイに乗るつもりだ？」

- (59) *yənan meŋin wala-Ø ja-java-ŋ-ə-n-Ø*
 お前 (能) どの (絶単) ナイフ-絶単 未来-使う-未来-挿入-3 単目-2 単主

「お前はどのナイフを使うつもりだ？」

- (60) *maŋen-wala-ta yənan j-ə-cvi-ŋ-ə-n-Ø*
 どの-ナイフ-具 お前 (能) 未来-挿入-切る-未来-挿入-3 単目-2 単主

「どのナイフでお前はそれを切るつもりだ？」

- (61) *maŋen'-ja-k yəcci ko-tva-ŋ-Ø*
 どの-家-所 お前 (絶単) 現在-住む-現在-2 単主

「どの家にお前は住んでいるのか？」

11) ちなみにジュコヴァ (Zhukova 1972, p.192) によれば、*meŋin* の格変化は以下のとおりである。

	無生	有生	
		単数	複数
絶対格	<i>meŋin</i>	<i>meŋin</i>	<i>meŋji</i> (双) <i>meŋju</i> (複)
能格	<i>meŋine-te</i>	<i>meŋinə-ne-k</i>	<i>meŋinə-jək</i>
場所格	<i>meŋinə-k</i>	<i>meŋinə-ne-k</i>	<i>meŋinə-jək</i>
与格	<i>maŋenə-ŋ</i>	<i>maŋenə-na-ŋ</i>	<i>maŋenə-jəkə-ŋ</i>
方向格	<i>maŋen-ətəŋ</i>	<i>maŋenə-na-jitəŋ</i>	<i>maŋenə-jəkə-jitəŋ</i>
浴格	<i>maŋen-epəŋ</i>	<i>maŋenə-na-jpəŋ</i>	<i>maŋenə-jəkə-jpəŋ</i>
奪格	<i>maŋenə-ŋqo</i>	<i>maŋenə-na-ŋqo</i>	<i>maŋenə-jəkə-ŋqo</i>
接触格	<i>meŋin-jite</i>	<i>meŋinə-ne-jite</i>	<i>meŋinə-jək-jite</i>
原因格	<i>meŋinə-kjit</i>	<i>meŋinə-ne-kjit</i>	<i>meŋinə-jəkə-kjit</i>
様態格	<i>meŋin-u</i>	<i>meŋi-ne-nu</i>	<i>meŋin-ə-cyinu</i>

- (62) *maŋen-wajam-etəŋ* *yəcci* *ku-lqət-ə-ŋ-Ø*
 どの-川-向 お前 (絶単) 現在-行く-挿入-現在-2 単主
 「どの川にお前は行くところだ?」
- (63) *yənan* *ənnəən* *maŋe-ʒəjamtəwəlʒ-ə-ŋ*
 お前 (能) 魚 (絶単) どの-男-挿入-向
jəl-ə-n-Ø-Ø
 与える-挿入-3 単目-2 単主-過去
 「お前は魚をどの男にやったのか?」

一方、有生の標示をうける場合には斜格において合成形も分析形も許容される。また、主部を省略して疑問代名詞のみが斜格で現われることもできる。以下、合成形の例は (a)、分析形の例は (b) で示す。

- (64a) *maŋen-qattak-na-k* *na-kətʒajŋa-ye-Ø*
 どの-兄弟-有単-所 (能) 反転-叱る-2 単目-過去
- (64b) *meŋin-ə-ne-k* (*qattak-na-k*) *na-kətʒajŋa-ye-Ø*
 どの-挿入-有単-所 (能) 兄弟-有単-所 反転-叱る-2 単目-過去
 「どの兄弟がお前を叱ったのか?」
- (65a) *yəcci* *maŋen-qattak-na-k* *ko-tva-ŋ-Ø*
 お前 (絶単) どの-兄弟-有単-所 現在-住む-現在-2 単主
- (65b) *yəcci* *meŋin-ə-ne-k* (*qattak-na-k*) *ko-tva-ŋ-Ø*
 お前 (絶単) どの-挿入-有単-所 兄弟-有単-所 現在-住む-現在-2 単主
 「お前はどの兄弟のところに住んでいるのか?」
- (66a) *yənan* *maŋen-qattak-na-ŋ* *jəl-ə-n-Ø-Ø* *kinuŋi*
 お前 (能) どの-兄弟-有単-与 与える-挿入-3 単目-2 単主-過去 肉 (絶単)
- (66b) *yənan* *maŋen-ə-na-ŋ* (*qattak-na-ŋ*)
 お前 (能) どの-挿入-有単-与 兄弟-有単-与
jəl-ə-n-Ø-Ø *kinuŋi*
 与える-挿入-3 単目-2 単主-過去 肉 (絶単)
 「お前はどの兄弟に肉をやったのか?」

おわりに

本稿では、コリャーク語において名詞句階層が文法構造に反映された1つの例として、名詞により異なる能格標示、有生性の範疇を中心とする文法現象を記述的に考察した。これにより、名詞句階層という概念がコリャーク語において個々の文法現象を総合的にとらえるための有効な1つの基準であることが確かめられたといえる。ちなみに、議論が煩雑に流れるのを避ける

ために本稿では扱うことができなかつたが、コリャーク語で所有を表す「所有形 (Possessive)」の **-nən**, **-in**, 修飾語と被修飾語の間の所有形よりも緩やかな関係を表す「関係形 (Relational)」の **-kin** として、他の格形式とは別個に形容詞形成接辞として伝統的に扱われてきた形式も、実はこれをいわゆる属格形式ととらえ、名詞の有生性の程度により所有形から関係形へと異なる標示をうけるのだと考えれば、より全体的かつ明解にコリャーク語の格体系を説明することができる。実際、上の3つの属格標識の違いによる名詞の分類は、能格標識の違いによるそれとほぼ対応している。これについては、改めて別稿をもうけ、本稿の議論と併せてコリャーク語における格体系を検討することにより、その記述の枠組みを再構成したいと考えている。

略号表

主=主語	目=目的語	単=単数	双=双数
複=複数	有=有生	挿入=挿入母音	形容=形容詞形成接辞
絶=絶対格	能=能格	所=場所格	具=道具格
与=与格	向=方向格	奪=奪格	沿=沿格
原因=原因格	随=随格		

参 考 文 献

Comrie, Bernard. 1978. "Agreement, Animacy, and Voice." Paper read to LSA Annual Meeting, Boston.
 ———. 1979. "The Animacy Hierarchy in Chukchee." *The Elements: A Parasession on Linguistic Units and Levels, Including Papers from the Conference on Non-Slavic Languages of the USSR* (Paul R. Clyne et al. eds.), pp. 322–329, Chicago: Chicago Linguistic Society.
 ———. 1981. *Language Universals and Linguistic Typology, Syntax and Morphology*. Oxford: Basil Blackwell.
 (松本克己・山本秀樹訳『言語普遍性と言語類型論』ひつじ書房1992)
 Dixon, Robert M.W. 1979. "Ergativity." *Language* 55. pp.59–138.
 Koptjevskaja-Tamm, Maria. 1995. "Possessive and Relational Forms in Chukchi." *Double Case* (F. Plank ed.), pp.301–321, New York/Oxford: Oxford University Press.
 呉人徳司(特古斯) 1995 「チュクチ語西部方言の音韻論」『言語学研究』14, pp.165–197。
 呉人 恵 1997 「コリャーク語の合成形と分析形」『北海道立北方民族博物館紀要』6, pp.9–30。
 Kurebito, Megumi. 2001. "Noun Incorporation in Koryak." *Languages of the North Pacific Rim* 6 (Osahito Miyaoka and Fubito Endo eds.), pp.29–57, Osaka: Faculty of Informatics, Osaka Gakuin University.
 Silverstein, Michael. 1976. "Hierarchy of Features and Ergativity." *Grammatical Categories in Australian Languages* (Robert M.W. Dixon ed.), Linguistic Series 22, pp.112–171, Canberra: Australian Institute of Aboriginal Studies.
 Zhukova, Alevtina N. 1968. "Korjaskij Jazyk." *Jazyki Narodov SSSR* V, pp.271–293, Leningrad: Nauka.
 ———. 1972. *Grammatika Korjaskogo Jazyka*. Leningrad: Izdatel'stvo Nauka.